

【調査：児玉九十】

児玉九十ゆかりの地の調査② — 第四高等学校

長谷川 倫 子*

1. はじめに

前回では、明星学苑・明星大学の創立者 児玉九十（1888-1989）が生誕～中学校時代を過ごした静岡県三島市・島田市・掛川市を巡る調査を行った。今回は、その続編として、児玉九十が青年期を過ごした第四高等学校（現：金沢大学）*¹ 関連施設を下記の日程で訪れた。

日 時：1 日目 2013 年 9 月 11 日（水）

調査先：① 金沢大学資料館

② 金沢大学附属中央図書館

日 時：2 日目 2013 年 9 月 12 日（木）

調査先：① 石川四校記念文化交流館

② 金沢ふるさと偉人館

『児玉九十自伝』略年譜*²によると、児玉九十は、1908（明治 41）年 9 月に第四高等学校大学予科第一部文科（英文）に入学し、1911（明治 44）年 7 月に卒業した。『児玉九十自伝』の「第三章 四校時代の思い出」に記されているように、第四高等学校時代は、児玉九十にとって、様々な人物から教育的薫陶を受けた時期であった。その体験は、その後の教育者 児玉九十を形成する上で、多大な影響があったと考えられる。

今回は、自校史研究として、児玉九十の第四高等学校の学生時代の様子を知るために、関連施設を訪れ、児玉九十に関わる資料を調査した。本稿では、各施設・資料に関する報告を行う。

2. 金沢大学資料館・金沢大学附属中央図書館所蔵の児玉九十関連資料

i 金沢大学資料館所蔵資料

金沢大学資料館*³で、「児玉九十」というキーワードでレファレンスを受けたところ、金沢大学資料館は、表 1 のような資料の所蔵が判明した。

* 学芸員 明星教育センター

①	明治40年9月 学籍簿 従明治40年入学者 [至明治43年入学者] 教務課
②-1	自明治41年9月 至明治42年7月 大学予科学年評点簿 第四高等学校
②-2	自明治42年9月 至明治43年7月 大学予科学年評点簿 第四高等学校
②-3	自明治43年9月 至明治44年7月 大学予科学年評点簿 第四高等学校
③	学年評点表 第四高等学校
④	明治41年9月入学以後 [昭和3年まで] 生徒姓名索引 庶務掛 第2冊

表1. 金沢大学資料館所蔵「児玉九十」関連資料

本稿では、上記の資料から「児玉九十」の項目について、概要を報告する。

① 明治40年9月 学籍簿 従明治40年入学者 教務課

『自明治43年9月至明治44年7月 大学予科学年評点簿 第四高等学校』は、明治40年から明治43年の入学者に関する学籍簿である。項目としては、族籍・氏名・生年月日・入学前履歴・入学級・入学月日・学業・摘要となっており、出身、学業経過などが分かる資料となっている。児玉九十の項目は、以下のような記述である。

- 族籍：静岡、平
- 氏名：児玉九十
- 生年月日：廿一年十一月十五日生
- 入学前履歴：掛川中学校卒業
- 入学級：大学予科第一部第一年甲類
- 入学月日：明治四十一年九月十一日
- 学業：明治四十二年七月大学予科第一部第一年及第
明治四十三年七月大学予科第一部第二年及第
明治四十四年七月大学予科第一部第三年卒業



図1. 『明治40年9月 学籍簿 従明治40年入学者 [至明治43年入学者] 教務課』表紙(金沢大学資料館所蔵)

この中で、「入学級」の項目について補足すると、大学予科とは、東京帝国大学進学者のための予備教育を目的としたものであり、修学年限は3年であった。当時の第四高等学校の類別では、第一部は法科と文科、第二部は工科・理科・農科・薬学科、第三部は医科となっていた。

また、第一部の法科は英文と独法、文科も英文と独文に分かれていた。児玉九十が所属した「甲類」とは、英文専攻を指し、独文は乙類と分類されていた。

これは、『金沢大学50年史 通史編』*4によると、高等学校の前身である高等中学校時代(1886～93年)の「西洋文化の積極的な摂取を目的とする「高等洋学校」としての使命を与えられ、その卒業生は、将来国家の行政や文化を担う文化官僚となるものとの期待」*5を引き継いだものであり、高等学校時代には、「外国語教育の重視がさらに顕著となり、特に第一部(法・文)の中では専攻語学による下位分類が起こった」*6とある。このような外国語教育について、児玉九十は、『児玉九十自伝』で、

要 摘		業 學					月入	入學	履入
年	月	年	月	年	月	日	校	前	
明治 40年 9月 日		明治 40年 7月 日	明治 40年 7月 日	明治 41年 7月 日	明治 42年 7月 日	明治 43年 9月 11日	大學 豫科第 一部第 一年 甲類	掛川 中學校 卒業	
		明治 41年 7月 日	明治 42年 7月 日	明治 43年 7月 日	明治 44年 7月 日			壽岡 平 兄玉九十 明治廿一年十一月十九日生	

図2. 『明治40年9月 学籍簿 従明治40年入学者〔至明治43年入学者〕 教務課』
兄玉九十項目記載部分（金沢大学資料館所蔵）

文科系の学生にとって、語学はすべての学問の基礎になる、もっともたいせつな科目であります。高等学校のクラスを専攻語学別に分けて募集することからも、それははっきりしています。したがって、1週間の授業時間数からみても、語学には大きなウエイトがかけられてあります。^{*7}

と述べており、当時の第四高等学校の様子を窺うことができる。

② 大学予科学年評点簿 第四高等学校

兄玉九十に関わる『評点簿』に関しては、『自明治41年9月 至明治42年7月 大学予科学年評点簿 第四高等学校』（第一学年）・『自明治42年9月 至明治43年7月 大学予科学年評点簿 第四高等学校』（第二学年）・『自明治43年9月 至明治44年7月 大学予科学年評点簿 第四高等学校』（第三学年）の3点が所蔵されている。『評点簿』には、以下の項目が記されている。

- 学科
- 学期・学年（第一学期・第二学期・第三学期・学年評点）
- 姓名
- 学年評点総数
- 学年評点平均数
- 判定
- 席次

この資料には、各学年・各学期の評点や判定、席次などの個人別の学業成績が記されている。学科に関しては、以下の科目（表2参照）が学年ごとに定められていた。

科目	学年	第一年 (明治41～42年)	第二年 (明治42～43年)	第三年 (明治43～44年)
国	語	○	○	○
漢	文	○	○	○
作	文	○	○	○
英	語 講 読	○	○	○
英	語 会 話 作 文	○	○	○
独	語 購 読	○	○	○
独	語 文 法 会 話 作 文	○	○	○
歴	史	○	○	○
数	学	○	○	—
体	操	○	○	○
論	理 心 理	—	○	—
修	身	—	—	○
物	理	—	—	○
法	学 通 論	—	—	○
経	済 通 論	—	—	○

表2 第四高等学校 第一部 (明治41年9月～明治44年7月) の学科目

第一年では、「国語」・「漢文」・「作文」・「英語購読」・「英語会話作文」・「獨語講演」・「獨語文法会話作文」・「歴史」・「数学」・「体操」の10科目であった。第二年では「論理心理」が加えられた。第三年は、「数学」と「論理心理」が外れるほかに、「修身」・「物理」・「法学通論」・「経済通論」が加わり、年を追うごとに、学修分野が広がっていったのが見て取れる。ただし、「数学」・「物理」は、「数学」が31名中3名、「物理」が24名中2名のみ、成績が記載されているので、選択科目であったと推測できる。

兄玉九十関連で特筆すべき点は、成績の席次に関することで、第一年が37名中3位、第二年が30名中1位、第三年が24名中1位という成績が残されており、兄玉九十の秀逸さが窺える資料であった。

③ 学年評点表 第四高等学校

『学年評点表 第四高等学校』（以下、『評点表』と略す）は、明治41年7月～明治43年7月のもので、『評点簿』と同様に、個人別の学業成績を記した資料である。『評点表』には以下の項目立てとなっている。

- 学科名 (国語・漢文・英語講読・英語会話作文・獨語購読・獨語文法会話作文・歴史・数学・体操)
- 諸科目平均点 ● 席次 ● 出身学校
- 判 ● 姓名 ● 府県

この『評点表』は、姓名が50音順ではなく、席次順で並べられている。兄玉九十に関しては、前述の『評点簿』の第一年3位・第二年1位・

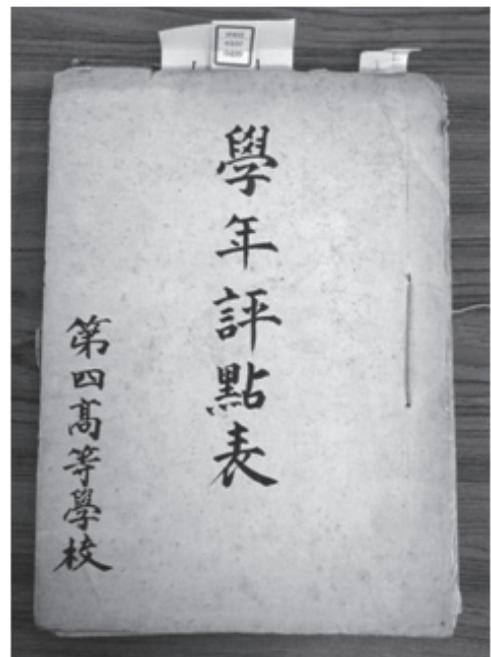


図3. 『学年評点表 第四高等学校』表紙 (金沢大学資料館所蔵)

第三年1位の席次の通り、名前が並べられていた。

このことに関しては、『児玉九十自伝』にも以下のように触れられている。

さいきん、明星大学の総務部長森下恭光教授が北陸へ出かけたついでに、四高の同窓会事務局のある金沢大学で私の学籍簿をみてきた、という話をききました。

(中略) 私の四高を卒業するときの成績が、第一部文科二十四名のうちのトップだった、つまり、名前が五十音順ではなく成績順に並んでいて、その一番目が私だった、というのです。(中略) じつのところ、私の成績がどう位置づけられていたのか、うかつにも忘れてしまっていましたので、私自身にとっても驚きでした。そして、「そういわれると、そうだったかもしれない」と、ゆっくりと当時の記録が甦ってきた幸いです。^{*8}

この記述の通り、『学年評点表』及び『評点簿』には首席の成績が残されており、「健康、まじめ、努力」を明星学苑の学訓とした児玉九十の人間性が顕れている。

図4. 『学年評点表 第四高等学校』
「第一部 第二年文科」部分
(金沢大学資料館所蔵)

④ 明治41年9月入学以後〔昭和3年まで〕 生徒姓名索引 庶務掛 第2冊

『生徒姓名索引』は、明治41年9月入学以後の卒業生の情報が記載されている資料である。項目としては、卒業番号・卒業年・姓名が記されている。児玉九十の項目では、卒業番号が「三二七六」・卒業年が「(明治) 四四、七、四」と記されている。

ii 金沢大学附属中央図書館所蔵

金沢大学附属中央図書館では、『第四高等学校一覧』第4巻(明治39～明治45年)を閲覧した。この資料には、教員一覧・職員一覧・学生一覧が記載されていた。教員一覧には、『児玉九十自伝』に登場する浦井鏗一郎^{*9}・西田幾多郎^{*10}などの著名な教授陣の名が記されていた。

特に浦井に関しては、『児玉九十自伝』において、以下のように回想されている。

私が浦井先生に心酔したことは、あとあとの私の道を決定したといえます。すなわち、私が東大で東洋史学を専攻するきっかけとなったのは、もちろん東洋史、とくにあとで述べる赤井直好先生の陽明学にひかれたからですけれども、それとともに、浦井先生の西洋史の理路整然たる講義をきいて、「東洋の歴史もあのようにやってみよう」と考えたからです。^{*11}

このように、第四高等学校の教員には、児玉九十の進路を決定付けた人物が多く存在しており、児玉九十の人物形成に大きな影響を与えたと考えられる。

その他に、中央図書館では、児玉九十在籍中の『北辰会雑誌』を閲覧することができた。この資料は、第四高等学校の学友会団体である北辰会が発行した雑誌である。児玉九十在籍時は、日露戦争後の国家的変貌の時期にあたり、その影響からか、学生の間で「擬国会」という模擬国会が開かれていた。これは、ときの政治的諸問題を論じるものであった。「擬国会」については、『児玉九十自伝』の「5 「擬国会」と「南下軍」」^{*12}に詳細が回想されているが、『北辰会雑誌』には議事録等が掲載されており、当時の学生の様子をみることができた。

4. 石川四高記念文化交流館・金沢ふるさと偉人館

金沢大学の後に、訪れたのが石川四高記念文化交流館*¹³と金沢ふるさと偉人館*¹⁴である。石川四高記念文化交流館は、第四高等学校時代の校舎を使用した「石川四高記念館」と「石川近代文学館」からなる展示及び多目的スペースを有する建物である。

今回は、石川四高記念館を訪れたが、赤レンガ造りの建物の中に、第四高等学校を紹介する展示スペースや往時の教室を再現した多目的利用室が設けられていた。展示スペースには、『児玉九十自伝』[5 「擬国会」と「南下軍」]にも登場する「南下軍」を紹介する展示や寮などの当時の学生生活を紹介するコーナーが充実している。

金沢ふるさと偉人館は、近代日本を支えた金沢出身の偉人20人を紹介する資料館となっている。児玉九十が第四高等学校在籍中に薫陶を受けた西田幾多郎や後に進学する東京帝国大学で講義を受けた鈴木大拙などが紹介されている。

5. おわりに

今回の調査では、児玉九十の生誕から青春期後半を過ごした金沢について、現地調査を行った。金沢という地で様々な恩師と出会い、学問的研鑽を重ねたことは、児玉九十の教育的理念に多大な影響を与えたと考えられる。それは、本学の教育の理念を理解するにあたって、大きな手掛かりになると思われる。また、実際に現地へ足を運び調査したことにより、原資料を確認することで『児玉九十自伝』の記載の信憑性も確認することができた。本稿では、紙面の関係で内容を割愛した部分があるが、今後もこのような調査を重ね、自校史研究としての児玉九十研究に活かしていきたい。

付記

旧字体は新字体に改めた。

本調査にあたって、金沢大学資料館・金沢大学付属図書館・神宮直子氏・各所関係者の方々に多大なる尽力を賜りました。末筆ながら、深く感謝の意を表します。

【注記】

- *1 第四高等学校…1886年の帝国大学令により、金沢の石川県専門学校を母体とする高等中学校として設置された。東京の旧制一高、京都の三高に次いででの設立で、金沢医学校を「四高医学部」として併合した。1894年の高等学校令により大学予科（修業年限3年。のち文科・理科よりなる高等科に改称）と医学部を設置したが、後者はのち金沢医学専門学校として分離した。第二次世界大戦後の学制改革により1950年3月に閉学。新制金沢大学法文学部と理学部の前身となった。
- *2 『児玉九十自伝』略年譜…「児玉九十略年譜」（児玉九十伝編纂委員会編『児玉九十自伝』、明星大学出版部、517頁）
- *3 金沢大学資料館…金沢城内から角間への移転に際し貴重な資料が廃棄されないようにという意図から構想され、資料展示のできる博物館機能を持った施設として平成元（1989）年に設立した。前身校から引き継がれてきた貴重資料を多数保管する。金沢大学（とその前身校）及びその関係者の学術資料・記録・文書等を収集・整理・保存並びに展示・公開し、金沢大学の管理運営や学生・教職員の自校教育、社会貢献や広報活動等の場として、運営されている。50年史編纂室の閉室の際、その収集した多くの文書資料を資料館が引き取り、金沢大学の歴史に関する重要文書の継続

的な収集・保存の役割が資料館を行っている。平成 13（2001）年に従来の博物館機能に文書館機能が付加された。

- *4 『金沢大学 50 年史 通史編』…金沢大学 50 年史編纂委員会編、金沢大学創立 50 周年記念事業講演会、2001 年 8 月
- *5 「西洋文化の積極的……文化官僚となるものとの期待」…『金沢大学 50 年史 通史編』、16 頁。
- *6 「外国語教育の重視が……下位分類が起こった」…『金沢大学 50 年史 通史編』、19 頁。
- *7 文科系の学生にとって、……ウエイトがかけられてあります。…『兄玉九十自伝』、101 頁。
- *8 さいきん、明星大学の……記録が甦ってきたと思います。…『兄玉九十自伝』、122～123 頁。
- *9 浦井鏗一郎…1868（慶応 4）年 -1932（昭和 7）年。明治 - 昭和時代前期の教育者。江戸出身。帝国大学卒。金沢の第四高等学校の教授となり、40 年間にわたって西洋史を講義した。著書に『西洋史年表』がある。
- *10 西田幾多郎…1870（明治 3）～1945（昭和 20）年。哲学者。石川県出身。1896（明治 29）年に、第四高等学校講師を経て、1899（明治 32）年に、第四高等学校教授に就任し、心理、論理、倫理、ドイツ語などを担当した。著書に『善の研究』『思索と体験』『場所的論理と宗教的世界観』などがある。
- *11 私が浦井先生に心酔したことは……と考えたからです。…『兄玉九十自伝』、96～97 頁。
- *12 「3 章 「擬国会」と「南下軍」」…『兄玉九十自伝』、111～116 頁参照。
- *13 石川四高記念文化交流館…石川四高記念館と石川近代文学館を併設した複合文化施設で、施設建物は、旧制第四高等中学校本館として使用されていた。石川四高記念館は旧制第四高等学校の関係資料が展示されている。展示は、1893（明治 26）年から約 60 年間、旧制高等学校（中学校）として使用された歴史をたどり、四高と四高生を育んだ風土と時代を知るための空間となっている。また、旧四高の教室は、公開講座などの文化交流の場として、多目的に利用できる。
- *14 金沢ふるさと偉人館…平成 5（1993）年に開館。金沢ゆかりの「近代日本を支えた偉人たち」として、さまざまな分野で国際的国家的業績をあげた人びとを加え、現在では 20 人の偉人を常設展示で紹介している。兄玉九十のゆかりの人物としては、第四高等学校時代に哲学を習った西田幾多郎、東京帝国大学で英語を習った鈴木大拙に関して、展示されている。

【参考文献】

- 兄玉九十伝編纂委員会編『兄玉九十自伝』（明星大学出版部、1990 年）
金沢大学 50 年史編纂委員会編『金沢大学 50 年史 通史編』
（金沢大学創立 50 周年記念事業講演会、2001 年）

【参考資料】

金沢大学資料館所蔵資料

『明治 40 年 9 月 学籍簿 従明治 40 年入学者 [至明治 43 年入学者] 教務課』

『自明治 41 年 9 月 至明治 42 年 7 月 大学予科学年評点簿 第四高等学校』

『自明治 42 年 9 月 至明治 43 年 7 月 大学予科学年評点簿 第四高等学校』

『自明治 43 年 9 月 至明治 44 年 7 月 大学予科学年評点簿 第四高等学校』

『学年評点表 第四高等学校 [明治 41 年 7 月～明治 43 年 7 月]』

『明治 41 年 9 月入学以後 [昭和 3 年まで] 生徒姓名索引 庶務掛 第 2 冊』

金沢大学附属中央図書館所蔵資料

『第四高等学校一覧』第 4 巻（明治 39～明治 45 年）